

# まんだら通信

第240号 (通巻275号)

平成28年06月 西暦2016年 佛暦2582年 皇紀2676年

安房国八十八ヶ所 第一番札所  
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084  
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉  
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺  
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040  
<http://www.shiunji.org/>  
Mail post@shiunji.org



## 愚直という宝もの

昭和六(一九三二)年十一月に熊本県で陸軍大演習が行われ、天皇は東京への帰途に、鹿児島市から戦艦『榛名』に搭乗され横須賀まで向かわれた。

お召艦は日没と共に出航した。夕闇が迫る中を、広い鹿児島湾(錦江湾)の中央を南の湾口部へと向かった。鹿児島市から湾口部まで、八十キロほどの距離がある。

天皇のご居室兼食堂として、『榛名』の後甲板の真下にある司令長官室があられた。お召艦の入り口のすぐ近くに、長官専用の階段が後甲板まで通

じていた。やがて、海が暗闇に包まれた。月も出ていなかった。木下道雄侍従が後甲板に出たところ、暗い甲板にたった一人、海軍軍装をして立っている後ろ姿が見えた。西の方に向かって微動だにせず、拳手の礼を行っている。

後から近づいてみると、天皇だった。敬礼をされている方角は、暗闇に閉ざされていて肉眼では何も見えなかった。木下は、甲板に備え付けられた倍率の高い望遠鏡に眼を当てて、天皇が敬礼されている方向を覗いた。次第に目が慣れてくると、遠くに薩摩半島の山々がぼんやりと望めた。

その下の海岸線に沿って、赤い紐のような光の線が認められた。所々に点々と光っているのがかがり火であることも分かった。赤い光の紐は、お召艦が沖を通るので、万歳を叫びながら奉送している、海岸沿いの町や村の人々のたいまつや提灯だった。

天皇は望遠鏡でご覧になつて人々が十数キロも彼方の岸で奉送しているのを認められ、それに一心に答礼されていたのだ。木下は、艦橋にいる艦長の元へ急いだ。そして、天皇が答礼なさっていることを話して、艦の探照灯をすべて点じるように頼んだ。艦長は感動してすぐにそのように命じた。

海岸に並んでいた人々は、遠くのお召し艦が何本もの探照灯の光を点ずるのを見た。そして、自分たちの誠意が通じたことを思い欣喜雀躍した。天皇は、お召艦が湾口部を離れて外洋に出るまで、寒く真つ暗な甲板で、直立不動、拳手の答礼を続けられた。

これは『昭和天皇三十二の佳話』(加瀬英明 実業の日本社)に収め

れた『彼方の岸へご答礼』という一章です。孫さんがいるお爺さんお婆さん、子育て中のお父さんお母さん、我が子や孫がいとしいと思つたら、中の一冊だけでも是非お読みください。お子さんとご自分の将来の幸せのための、何よりの一冊です。

愚直とは、正直すぎて気が利かない人のこと、誰にでもできる事ではありませんが、人として、これ以上の美德はないと言ふべきでしょう。近ごろは、小利口で弁が立ち、器用に立ち回る人が持て囃されるように見受けられて、仕方ありません。でも落ち着いて考えてみると、昔から日本には、愚直な人や企業は沢山あります。世界一長寿の企業は、『金剛組』という、奈良の東大寺や興福寺を作つたという宮大工で、創業千三百年だそうです。

京都に行くたびに、数珠の手入れをお願いする珠数屋さんがあります。しもた屋風の、目立たない店構えですが、ある時「こちらは何年ぐらいいになりますか」と聞いたところ「智積院さんと一緒に根来から来ましたから、かれこれ四百年過ぎました」という返事でした。京都には『振り売り』の大原女さんや、街角の小さな豆腐屋さん、八百屋さんが沢山あり、みんな自信と拘りを持って、お客さんを大事にしています。

数年前アメリカで、欠陥車を買つたという疑いでトヨタがやり玉に上がり、アメリカ議会の公聴会で毎日厳しい追及に遭いました。針のむしろの豊田社長は、不利になることも含めて誠心誠意説明を尽くしました。やがて、欠陥は無実で、補償金目当ての茶番だつたことが分かり、トヨタの信用は今まで以上に高くなりました。出来る出来ないは兎も角、私たちは先ず相手を思いやることは当たり前と思つていますが、世界の常識は逆で、自分の利益が先だそうですね。

その『愚直』の元締めは、畏れ多い事ですが、矢張り何と言つても昭和天皇に代表される日本の皇室だろうと思ひます。

神武天皇ご即位以来一二五代二六七六年、一つの家系がこれほど続く王家は、世界中探しても日本以外にありません。当たり前すぎてニュースにもなりませんし、私たちは普段気づいていませんが、歴代の天皇陛下の第一のお勤めは、国民が日々恙なく過ごせるよう祈ることですね。

良く知られていますが、仁徳天皇は、食料不足から民家のかまどから煙が立たないのを見て、租税の取り立てを三年間取りやめ、自ら質素に徹しました。昭和天皇は、国民と同じ配給の雑穀をお食べになり、つぎの当たつた普段着をお召しになるという、質素なご日常の上に、明治憲法を守ることを、つまり約束事に忠実に従うことに、特に心を砕かれました。

ですから、戦争を煽る新聞が作り出す、間違つた世論には殊の他にお心を悩まされ、昭和六年、満州にいた陸軍(関東軍)が起した満州事変の時には、「私は国際信義を重んじ、世界の恒久平和のために努力している。それがわが国の発展をもたらすし、国民に真の幸福をもたらすものと信じているからである。」

然るに軍の出先は、命令を聞かず、無謀にも事件を拡大し、武力を以て中華民国を圧倒しようとするのは、いかにも残念である。これによつて列強の干渉を招き、国と国民を破滅に陥れることになつてはまことに相済みぬ。九千万の国民と皇祖皇宗から受け継いだ祖国の運命は、今、自分の双肩にかかつている。それを思い、これを考えると夜も眠れない。

残念なことに、昭和天皇のご心配は現実のものとなり、大東亜戦争によつて、建国以来始めて、外国に占領されるという恥辱を味わいました。あの時から七十年、幸い武力による争いから無縁で来ましたが、日本の周りは今また、きな臭い風が吹いています。

その中で、一貫して平和外交を進めてきた、愚直な日本への期待は高まっています。世界は日本のリーダーシップに期待しています。

世界は日本のリーダーシップに期待しています。

にっぽん人情小噺 三遊亭鳳豊  
第一二五話 父と息子

最近、嫌なニュースが多いですね。親によるわが子への虐待、反対に、子供の親殺し、さらには、夫殺し、妻殺し……。

さすがに落語の世界では、親孝行の噺はあっても、子供をいじめたりする話はありませんね。子供が出てくる噺で有名なのは「子別れ」ですね。おとつあんが酒ばかり飲んでどうしようもないので、とうとう別れて、おっかさんがその細腕で子供を育てるんですね。

それから数年後、酒もばくちもぶつりやめたおとつあん、もともと腕のいい大工だったから仕事も増えて一生懸命働いていたある日、仕事で訪れた町でふと、息子が「父なし子」と、友達にいじめられているのに出会う。

おとつあん、たまらずわが子を助けて、「おっかさんに絶対内緒だぞ」と言ってお小遣いをあげる。ところが、家に戻ってきて、そのお金をおっかさんに見つかってしまい、盗んできたと思われ、ものすごく叱られる。「こんなに貧乏しても、私はあんたをそんな子に育てた覚えはないよ」。とんかちで殴られそうになる。そこで、おとつあんと会ったことを白状し、いまはおとつあんが立派な棟梁になっていることをおっかさんに知らせ、ふたりは元の鞘におさまる。「おっかあ、子はかすがいだなあ」とおとつあんが言うと、子供が「だから、げんのう（とんかち）で殴られそうになったんだ」で終わるわけですが、「かすがい」というのは柱と柱をつなぐ「」の字型の釘ですよ。父親と息子の「かすがい」になった看護師さんの話を紹介しますね。

富山県で実際にあった話です。訪問看護師の有馬正子さんは、いつものように在宅治療の専門医、石橋良平先生とお宅にお会いしました。家にいたのは、八木孝之さん、八十四歳。元大が学教授で、奥さんを早くに亡くされてからひとり暮らしで暮らしていたのですが、十数年前、体の調子が悪いと、以前から知り合いの有馬さんに相談したところ、石橋先生を紹介してくださいと、以来、週に一回の往診を受けるようになりまし。敷地内に庭のある古い大きな家ですが、日常生活も不自由なので、ヘルパーさんに

お願いして、食事の世話、洗濯などもお願いしています。

お嬢さんでもいければよかったのですが、息子さんが二人。ご長男も国立の大学の教授をされていて、近頃退官されたとのこと。車で十分もかかる場所に住んでいるにもかかわらず、これが父と息子、まさに犬猿の仲なのです。

原因は、同じ研究者だけに、若いころから、意見が合わなかったようです。「お父さんのような古い頭の人が威張っているから、この学会は進歩しないんだ」とかなんとか。

有馬さんも、その理由がよくわからない。とにかく、ここ二十年以上、つきあいがまったくないそうです。

ご次男は、東京の大手商社で働いていますが、転勤転勤で、日本にいないことのほうが少ないようです。それに、昔から八木さんは、思想的に家長制度を引きずっていますから、「子供の世話になんか、ならん！」の一点張りです。

しかし、七十代はまだよかったのですが、傘寿（八十歳）を過ぎてから、さすがの頑固親父にも体力的衰えが見え始めました。いずれ、誰かの世話にならなければなりません。お金には不自由していませんから、施設に入ることになるのでしようが、それにしても、息子さんたちと相談もなしというわけにはいけません。そう考えた有馬さんは、ある日、ひとりで薬をお持ちした時に、八木さんに「どうですか？ 近くにいらっしゃるご長男さんとお話をなされては……」と言ったとたん、有馬さんが飛び上がるほど、大きな声で怒鳴られました。

「馬鹿もん、あんなくそつたれと誰が話をするもんか。あいつは私の息子じゃない。あんたも息子に頼まれて、財産目的でこの私に近寄ったのか、ああ、もういい、帰ってくれ、帰れ」。取りつく島もありません。

「すみません、すみません」と謝って、その日は帰りました。そして、翌日の日曜日、自分はお父さんの在宅看護の看護師であることを名乗り、ご長男の家に、「ちょっとお話をしたい」と、電話を入れたのです。

もちろん、余計なことだとは思いましたが、もともとお節介症候群の有馬さん、このままでは埒があかないと思ったからです。

ご長男は、穏やかな紳士でした。家に招いてくれ、八木さんの現状を説明すると、「父が大変お世話になってます」とまで頭を下げてくれました。（ああ、この人なら大丈夫だ）、有馬さんはそう思うと、こんな話をしたのでした。

「実は、世間話で息子さんの話になった時、お父さまが私にこうおっしゃったのです。ふたり息子がいて、ひとりは私と同じ大学教授、下の息子も大手商社マン。立派な息子たちだ。ただな、長男は私と性格が似ていてな、短気で怒りっぽい。だから、人生でもかなり損をしたと思う。私も何か、あいつの役に立ってあげたいというも思っているんだが、若い時にケンカをしてしまったな、言わないでいいことまであいつに言ってしまった。」

父親としてあいつの大事な時期に何もしてあげられなくて、申し訳ないと今思ってるよとおっしゃって……。もちろん、嘘も方便というやつです。

すると、ご長男さんは真剣に聞いてくれて、「それで、僕は何をしらいいですか」というので、「たった一度でいいですから、私がお父さまをベッドから起こす時に背中を押すのを手伝っていただけませんか。お父さまは、もう、ご自分で起きられないんです」と言ったのです。

そして、一週間後の晴れた日曜日、ご長男がやってきました。

「お父さん、ごめんなさい。近くにいなながら何もしてあげられなくて。有馬さんからお父さんの状態を聞いて、飛んできた。ほんとにごめんね」と言いながら、お父さんの背中をやさしく押しあげたそうです。その時、有馬さんは、はつきりと見ました。お父さんは起き上がりながら何も言わず、目をつむって、胸の前で手を合わせていたそうです。目をつむっていたのは、目をあけたらうれし涙が止まらなくなるからだ、と思ったら、今度は有馬さんの目から涙がこぼれ始めたそうです。



▼今月の野草はシロツメクサ【マメ科シャジクソウ属】。クローバーとも言いますね。ツメクサは『詰め草』で、弘化3年(1846)オランダから献上されたガラス製品が壊れないように、詰め物として日本にきた牧草だそうです。見つけると幸運に恵まれる、という四つ葉のクローバーは1万分の一くらいの頻度だそうですね。幼い頃、このクローバーやレンゲソウで花かんむりを作ったりして、暗くなるまで野原で遊んだ思い出をお持ちの人も多いのではないのでしょうか。 2016.06.08 龍渉

▼ご家族の誰かに万一の時は、葬儀屋さんより前にお寺に相談することを忘れないください。一昔前までは、隣近所や親戚が相談に乗ってくれましたが、近ごろはそうでもなくなりました。お寺だけは頼りになる相談相手ですから、そのことを、呉々も忘れませんように。「歳の関係で、故郷のお墓へのお参りが辛くなったので、今のお墓を片づけて、永代供養墓(密蔵塔)に引っ越したいが…」と相談されることがあります。それも一つの方法ですが、代々お守りしてきたお墓です。お寺が代わりにお守りするという方法もあります。ご相談下さい。

▼うろろうしている間に、今年も半分過ぎようとしています。1ページ上の写真。南房総は今、どちらを向いても若緑一色です。▼数年前から、体力の落ち方が急です。80年も動かした身体ですから、不具合が起きて不思議ではないのですが、お医者さんは『肺気腫(POCD)』ですから治ることはありませんが、先延ばしは出来ずから、いっぺん入院して養生の仕方を勉強した方が良いでしょう」と言うことで、5月10日から15日まで、亀田病院へ行ってきました。僅かの日数でしたが、お陰様でのんびり過ごすことが出来、命の洗たくをすることが出来ました。

余滴